

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター
[スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座]



UTCMES ニュースレター

VOL.26 2025

1. 学びの寄港地 1	3. 駒場中東セミナー開催報告 10
(1) 関 颯太 1	4. バフワーン文庫便り 11
(2) 西山 尚希 3	5. センターの活動紹介 12
2. この一品——私の研究モノ語り 5	6. スタッフ・発行者情報 12
(1) 伊藤 匠平 5	
(2) 松原 優華 7	

1. 学びの寄港地

(1) 朝日照らす学びの丘で —— 観察者から生活者へ、トルコ留学の日々
コチ大学大学院人文社会科学部研究科博士課程

関 颯太

森に抱かれた知の拠点

イスタンブールの中心から公共交通機関を乗り継ぎ約一時間半。黒海を見下ろす丘の上に、私の新しい研究拠点がある。2024年10月よりトルコ有数の研究大学であるコチ大学で博士号取得を目指す日々が始まった。

イスタンブール県黒海沿岸部、ルメリフェネリの深い森に抱かれるようにしてキャンパスは佇んでいる。市街地の慌ただしさから切り離されたこの空間では、まるで異なる時が流れている。朝靄の中を白く輝く黒海の水平線から日が昇り、午後には松林を通り抜ける光が木漏れ日の帯となって研究室を彩る。甘く湿った土の香りと松の芳しい香りが漂う中、風

に揺れる木々のざわめきが研究の伴となる。そして冬の澄んだ夜空には、枝葉の間から覗く星が煌めく。大学への道中にボスポラス海峡を見下ろす景色がなければ、ここがイスタンブールだということすら忘れてしまいそうだ。



朝、大学への路でボスポラス海峡を望む

新進気鋭の研究大学

1993年に設立されたコチ大学は、その歴史こそ30年と浅いものの、すでにトルコを代表する研究機関としての地位を確立している。2024年9月に発

表された最新のトルコ高等教育機構(Yükseköğretim Kurulu)による研究大学ランキングでは、名門の中東工科大学(アンカラ)やサバンジ大学(イスタンブール)を抑え、堂々の総合首位に輝いた。とりわけ、トルコ政治・外交研究の分野では、国際的に著名な研究者を多数擁し、実証的な研究の面でも卓越した実績を誇る。トルコ政治を専門とする研究者を志す私にとってもトルコ国内はもとより、世界的に見ても最高水準の学びの場を提供している。

充実の研究インフラ

研究に打ち込める環境は、充実した施設・設備によっても支えられている。キャンパス内の食堂では週末や祝日を問わず、朝食から夕食まで安価な食事が提供され、自炊をする時間と労力の大幅な削減になる。24時間開館の図書館は豊富な蔵書を誇り、早朝から深夜まで利用可能なスポーツ施設も完備されている。ただし、筋トレ歴9年の愛好家の私としては、ジムにケーブルクロスオーバーがなく、スクワットトラックの数も限ら

れ、ダンベルも 30kg までしかない点は少々物足りない。とはいえ、研究の合間のリフレッシュには十分な機能を果たしている。

キャンパスの知的活動は、講義の枠を超え、多岐にわたる。各研究科や学部、研究センターでは連日、多彩なイベントやセミナーが開催され、その情報は土日祝問わず毎朝 7 時過ぎに配信される「KUDaily」という学内向けのメールマガジンで共有される。研究発表会や学術講演にとどまらず、著名アーティストのコンサート、ジャズ、映画上映会、演劇やオペラ公演なども頻繁に企画され、キャンパスは学問と文化の躍動に満ちている。

学術活動の日々

授業は、ロースクールを除き、学部から大学院まですべて英語で展開される。2024 年度秋学期、私は「地中海の国家と社会」「政治理論」「リサーチメソッド」を履修しているが、その学術的要求水準の高さに日々刺激を受けている。「政治理論」では、プラトンの『国家論』からニーチェの『道徳の系譜』まで、政治哲学の古典を英語で毎週クロノロジカルに読み、批判的に議論することが求められる。一方、「リサーチメソッド」は質的・量的方法論それぞれを専門とする教員から授業を受けるという内容であり、課題が要求する量と質は非常に高い。たとえば、一見手軽そうな「ショートアサイメント」という名の課題では、先行研究の批判的検討から、独自の仮説提示を行った上で、授業で扱った回帰分析による実証まで、一本の論文に匹敵するショートとは名ばかりの内容が要求される。さらに学期末には研究費獲得を想定した本格的な研究計画書の提出も控えている。

博士課程での研究

博士課程の大きな節目となるのが、2 年次春学期末に実施される博士候補生試験である。政治学・国際関係論の古典から現代までの重要文献、数十冊に及ぶリーディングリストをもとに、筆記と口述の二段階で実施される。試験は、博士

論文執筆への関門として位置づけられ、合格して初めて博士候補生として認められ、論文執筆に着手する資格を得られる。

大学院生には学費免除が適用され、ティーチングアシスタント（TA）とリサーチアシスタント（RA）の業務が割り当てられる。私の TA 業務は、授業への同席、出席確認、試験監督、答案の採点など、教育支援が中心となっている。一方、RA の業務では、トルコ・EU 関係、国際政治経済研究の第一人者として国内外で高名な政治学者の下で働く機会に恵まれている。隔週で教授の研究室を訪れ、まずはトルコ内外の政治情勢について議論を交わし、その後でトルコ政治に関する最新の研究論文を精読する。近く定年を迎えるこの碩学との対話から、トルコや周辺地域の政治動向とその国際的影響について、論文として結実する前の生の思索に触れ、その該博な学識と広い視野から学べることは、かけがえのないものであると感じている。特に私が留学を始めた 2024 年 10 月以降、トルコ国内外で政治的に重要な出来事が相次いで発生し、その度に出来事の背景やトルコ政治への影響について同教授と深い議論を重ねる機会に恵まれている。

同期の存在は私の研究生生活に大きな刺激を与えてくれている。政治学・国際関係分野で共に博士課程に進んだ 3 人は、それぞれ国内外の有名大学で修士号を取得しており、授業での議論を通じて彼らの深い知識と洞察力に触れる機会が多い。彼らは全員がトルコ生まれのトルコ育ちで、母国の政治や社会情勢について深い知見を持つ。トルコ政治を研究する私にとって、背景を逐一説明する必要なく、実質的な議論を交わせる仲間を得られたことは僥倖だった。今後、学位取得までの道のりを共に歩む中で、互いに高め合える関係を築いていけることを確信している。

大学院生には専用の共用研究室が与えられる。鍵付きロッカーと個人の机、椅子が備え付けられ、本や私物を自由に置くことができる。大学は 24 時間開放されているため、早朝から研究を行うことも可能である。研究室に隣接する共用

キッチンも、研究生生活を支える設備の一つである。平日は朝から夕方まで、キッチン専属のスタッフが常駐し、フィルターコーヒーやお茶が自由に飲める。ウォーターサーバーもあり、飲み物の面でも事欠くことがない。

トルコならではの「ゆるさ」

最高水準の研究環境を誇るコチ大学だが、その一方でトルコならではの微笑ましい「ゆるさ」も垣間見える。食堂のエピソードを一つ。ここには一台のテレビがあり、サッカーの試合中でなければ、レジの人からリモコンを借りて自由にチャンネルを変えることができる。

私は夜の一人での食事の際には、ニュース番組を見ながらトルコ情勢を追うのを習慣にしていた。ところがある日、いつものようにテレビの前に座ったものの、リモコンが見当たらない。レジの人に尋ねると、「この前サッカーの試合で白熱したあと、（リモコンは）どこかに行ったみたいだけど、そのうち見つかるよ」と何とも思わない様子で肩をすくめるだけ。なぜ、どこへ、どのようにして——疑問は尽きなかったが、彼の特に気にしていない様子を見てこちらも気にしないことにした。それ以来、食堂の黒いモニターにはそれを見つめる私の姿が反射しているのみである。



黒いモニターと化したテレビ

もう一つ印象的な「ゆるさ」は、キャンパスの夜の訪問者たちだ。ある夜、帰り支度を始めていると小さな影が視界を

よぎった。近づいてみれば一匹の猫。イスタンブールの街に猫が溢れているのは有名な話で、本学でも構内で彼らの姿を見かけることは珍しくない。

しかし、建物の中で出会うのは初めてだった。スイングドア式の入口を考えると、誰かが招き入れたとしか思えない。後日、先輩院生に聞くと、「夜になると猫たちは好きなように出入りしているよ。大人しいから気にしなくていいんだ」とのこと。研究の息抜きに、キャンパスの猫たちと戯れるひととき——これもまた、コチ大学ならではの「研究環境」の一つかもしれない。



夜のキャンパスと時計塔

フィールドワークとしての日常

「あなたにとっては今のこの瞬間も含めて全てがフィールドワークだね」。リサーチメソッドの授業でフィールドワークについて議論した日の夕食の席で、同期がふと私に語りかけた。確かに、これまでも研究目的で選挙の時期などに中期の現地調査をトルコで行ってきた。しかし、イスタンブールに居を構え、外国人留学生とはいえトルコ社会の一員として日々を重ねていく今の経験は、全く新しい意味を持つ。博士課程という高度な知的環境での研鑽と練達、そして時に垣間見えるトルコならではの「ゆるさ」との邂逅——これら全てが、研究者としての私のトルコという地域に対する「新しい学び」となっている。

希望とともに

本稿を書いている今、留学生活はまだ3カ月目を迎えたばかりである。毎朝、正門をくぐり、黒海を望む時計塔と朝日に輝く本部棟を目にするたび、長らく目標としていたコチ大学での留学が現実となった実感が込み上げてくる。初めての英語での大学院レベルの授業、終わりの見えない量の課題、そして待ち受ける博士候補生試験。研究室と家との往復という日々の、時として、その重みに圧倒されそうになることもある。そんなとき、私は共和国建国の父、ムスタファ・ケマル・アタテュルクの言葉を思い出す。

「希望がない状況などない。希望を失った人間がいるだけである。私はいかなる状況でも希望を失うことはなかった」

この言葉は、一説によれば、1919年、第一次世界大戦での敗戦によってオスマン帝国が西洋列強の侵略によって解体の危機に瀕していた時期に、彼が祖国解放の闘争を開始する際に語ったとされる。私の目標に国家の存亡をかけた闘いほどの壮大さはないが、この留学は私の人生とキャリアの重要な岐路であることに間違いはない。アタテュルクの不屈の精神を胸に、一步一步、着実に博士号取得への道を進んでいきたい。

※本留学は日本学生支援機構 海外留学支援制度（大学院学位取得型）の支援を受けている。

(2) マフムダーバード（インド）におけるアーシューラー儀礼調査の記録

東京大学大学院人文社会系研究科
博士課程

西山 尚希

著者は2023年のアーシューラーをインドで過ごした。アーシューラーとは、ヒジュラ暦で1番目の月にあたるムハッラム月の10日のことである。十二イマーム派の奉じる第3代イマームであり、預言者ムハンマドの孫にあた

るフサインがこの日カルバラーにて殉教したことから、毎年十二イマーム派は数日にわたって追悼儀礼をおこなう。一般的には殉教譚をもとにした劇や説教、手で胸を、あるいは鎖で背中をたたくななどの儀礼行為が行われていることがよく知られている。インドでは2024年は7月28日の日の入りから29日の日の入りまでがアーシューラーの日であったが、筆者は26日から現地に入り、30日まで滞在した。

筆者が訪れた町は、デリーから国内線でウッタルプラデシュ州の州都であるラクナウへ向かい、さらにそこから北にむけて車を1時間以上走らせたところにあるマフムダーバードという場所である。インドは総人口14億を超える大国であるが、そのうちイスラーム教徒は15%、さらに十二イマーム派教徒はそのうちの10-15%ほどであるとされている。ラクナウを中心とする地域は元来アワド藩王国の中心地域であることもあり、比較的イスラーム教徒が多い地域である。マフムダーバードも人口は5万人前後とされるが、そのうちイスラーム教徒とヒンドゥー教徒はほとんど同数であり、十二イマーム派住民は3000人ほどであるとされる。筆者はJSPS 科研「スナ派」と「十二イマーム派」：自己意識と相互認識のイスラーム史研究にむけて」(23K25371)の調査メンバーとして、この町の十二イマーム派有力者の邸宅に宿泊させてもらいながら、アーシューラー儀礼に参加させていただいた。調査の中では、一般的に知られているアーシューラー儀礼と同様のもの、例えば集会での説教や胸をたたく儀礼も頻繁に実践されていたが、本稿ではこの地域、あるいはこの町に特徴的であった点を中心に紹介したい。

刃物を使った自傷行為

現代の十二イマーム派法学者のほとんどすべては、アーシューラーの儀礼において流血や内出血などを伴うような自傷行為を行うことをハラーム（禁止行為）であるというファトワー（宗教法的見解）を出している。そのためイランでは

刃物を用いた自傷行為などは禁止されており、たとえ実践されていたとしても公の場ではなく私的な場にて秘密裏に行われるのではないかと考えられている。一方、筆者が訪れたマフムダーバードでは、イランでも行われているような、平手で自身の胸を打つ儀礼がほとんどであったものの、刃物を用いた流血を伴う自傷行為が十数人規模で行われていた。彼らが使用するのは、鎖の先に刃渡り10センチメートル前後の刃物を複数束ねた道具である。この道具を手を持ち、前かがみになり、Yā Husayn（フサインよ）という掛け声に合わせて自身の背中に刃先を打ち付けていた。彼らはみな男性であり、その多くが若者で、路上で大勢の観衆に囲まれた中、この自傷行為を行っていた。近くの民家には消毒会場が設置され、消毒液を背中に噴射し、布で抑えて止血をしていた。とはいえ、そこで使われる刃物も、止血に使う布も使いまわされており、肝炎などの感染症のリスクは決して少なくないものと思われる。彼らの儀礼がフサインの殉教を悼むという宗教的目的から行われているのか、あるいは個々人のなかにその他の動機があるのかは定かではないが、いずれにせよ筆者から見ると痛々しい光景であった。

スンナ派住民の参加

筆者は調査をするまで、フサインを追



自傷行為で用いられる刃物

悼する儀礼をアーシューラーに行うのは十二イマーム派教徒のみであると考えていた。スンナ派にとってこの日は自発的な断食を行うことが推奨されている日であるとされていることは知っていたものの、それ以上のことを行うことはないと考えていた。しかし、マフムダーバードにおいては、十二イマーム派のアーシューラー儀礼を快く考えないスンナ派住民もちろんいるものの、近隣の村に住むスンナ派住民のなかにはこの儀礼に積極的に参加する者たちもいた。

アーシューラーが近づくとこの地域ではタアズィエとよばれる、カルバラーのフサイン廟を紙や簡単な骨組みで再現した模型が多く作られる（南アジアではこれらの模型をタアズィエと呼ぶが、イランなどではフサインの殉教劇をタアズィエと呼ぶ）。タアズィエは大小、装飾などさまざまなものがあり、自作する者もいれば、露店で購入する者もいるようであった。これらは毎年アーシューラー直前に作成され、家の中に飾られたり、追悼行列の一部に組み込まれたりする。そして最終的にはアーシューラー当日に村のはずれに集まって穴を掘り、あたかも埋葬するかのように地中に埋められる。

筆者はアーシューラー前日の夜にマフムダーバード近隣のスンナ派住民の多い村を訪れた。ここでは大きなタアズィエが2つ、異なるデザインで作られており、翌日の追悼行列や埋葬儀礼に使用するようであった。ここではスンナ派住民に聞き取りをすることができた。アーシューラーの儀礼に参加する理由を尋ねると、先祖代々毎年行っていることを引き継いでやっているだけだと答えていた。興味深かったのは、フサイン殺害を命じたウマイヤ朝第2代カリフであるヤズィードについて質問したときであった。初めにインタビューに応じてくれた方はヤズィードが誰であるか知らなかったようだが、隣にいた男性は、「彼のしたことについては神が裁定することである」と付言しながらも、ヤズィードは「嫌悪（nāfrat）の対象である」と明言した。このときアリーと対決したムアーウィヤについて聞き取ることができ

なかったのは残念であったが、彼らのフサイン殉教にかかわる考え方やアーシューラー儀礼への姿勢は他の十二イマーム派住民とおおむね同じようなものであるといえるかもしれない。



タアズィエの「埋葬」

ダリットたちの参加

マフムダーバードのアーシューラーではスンナ派教徒にとどまらず、ヒンドゥー教徒も参加していた。よく知られているように、ヒンドゥー教ではカースト制度があるが、アーシューラーにはカースト制度に属さない最下層にあたるダリットと呼ばれる人々が多く参加していた。彼らは主に追悼行列において太鼓を打ち鳴らしながら先頭を行く役割を担っていた。その後ろに服喪を示す黒い服を着た十二イマーム派教徒や、フサインが乗っていた馬に見立てて飾り立てられた馬、棺の模型、タアズィエなどが列をなす。十二イマーム派教徒らは行列の中でも神妙な面持ちで「追悼」という本来の意義を意識しながら儀礼をおこなっている一方、先頭で太鼓を鳴らすダリットたちは酒を飲み、まるで宴会のように楽しみながら太鼓を打ち鳴らしていた。あまりにも楽しすぎて行列を先導するという役割を忘れ、後方の十二イマーム派教徒がやってきて急かすまで動かなくなってしまうほどであった。

彼らは追悼行列以外にも、我々調査隊が「アラム祭り」と呼称した儀礼にも各村から参加しに来ていた。この儀礼では、マフムダーバード周辺の村それぞれから大小さまざまな旗（アラム）を作成して持参する。これらのアラムは、長い竹に模様の入った布を巻くことで個性的な装飾をしたものであった。なかに

は、帆のように広げるつくりになっており、そこに Yā 'Abbās（アッバースよ）という文字が現れるものもあった。筆者らが宿泊させてもらっていた邸宅はマフムダーバードのアーシューラー儀礼の中心地としての役割も担っていたが、彼らはこの邸宅にあるイマームバーラー（十二イマーム派の儀礼用集会所）内部に立てられた小さなアラムのバラカ（祝福・ご利益）を求めてやってくる。アーシューラーの前夜に彼らはそれぞれイマームバーラーのもとにあつまり、自分たちのアラムの先端をイマームバーラーのアラムの先端に触れさせ、立て掛ける。比較的小さなアラムであればイマームバーラー内部に立て掛けられるが、中には 10 メートルを超えるのではないかと、いほど巨大なアラムを持ってくる集団もあり、彼らはイマームバーラーの入り口に突き刺すかのようにして自身のアラムをイマームバーラーのアラムに触れさせてバラカを受け取り、その後イマームバーラーの外壁にアラムを立て掛けていた。これらのアラムはアーシューラー当日、タアズィエを埋葬しに向かう行列でも掲げて運ばれていた。巨大なアラムを運ぶ様相はまるでサーカスや大道芸のようであった。

我々はこの「アラム祭り」の場で、子供のころから家族で毎年参加しているというダリットの青年に聞き取りを行うことができた。まず、彼に対して十二イマーム派の祭りに参加していることについて尋ねると、彼の認識ではこの祭りは十二



イマームバーラーに立て掛けられるアラム

イマーム派も参加するものではあるが、より広く、みんなが参加するものだった。さらに、彼にとってフサインとは「人倫（insānīyat）のために自身を犠牲にして戦った人間であり、尊敬に値し、強い力を持っている」存在であるとのことであった。また、アラムをアーシューラー儀礼で運ぶことについては、強い信仰心をもってアラムを運べば、商売や試験などにかんする願いが叶うと信じており、また同時にアラムを運ぶ姿を見せることで女性の関心を引くことができるとも言っていた。アラム以外にもアーシューラーの儀礼を行うのかと問うと、タアズィエを家に飾り、「埋葬」の場へ運ぶと証言してくれた。最後に我々が、ムハンマドを信仰しているかと問うと、彼は「ムハンマドもヒンドゥーの神々もともに信仰している」と答えてくれた。

彼らがアーシューラーに参加する動機は、イスラーム教徒の参加者が考えているようなフサインの殉教を悼むことから幾許か異なるものであろう。むしろ強い力をもつものに対する畏敬の心やご利

益への期待、あるいは単に先祖代々の伝統を守っているという意識から参加しているとも推察される。はたまた、単に年に一度の楽しい祭りだという以上の参加意識はないのかもしれない。

一般的には、アーシューラーというと、十二イマーム派の儀礼であり、イランで行われているものを思い浮かべる読者が多いのではないと思われる。しかしアーシューラー儀礼はそれぞれの地域ごとの規模や形態によって、日本を含めた世界各地で行われているものである。筆者が観察したマフムダーバードの儀礼はあくまでも一事例に過ぎないものではあるが、本記事が読者のみなさまにとって、アーシューラー儀礼という文化の多様性と奥深さについて改めて考える一助となれば幸いである。



行列の中で披露されるアラム

2. この一品——私の研究モノ語り

（1）辞書と文書館：トルコでの留学生活と交えて

東京大学大学院総合文化研究科博士課程
伊藤 匠平

辞書と私

筆者は現在、トルコ・イスタンブールに所在するボアズィチ大学の客員研究員と

して留学している。オスマン帝国近代史を専門とする筆者は、自身の研究においてオスマン語（アラビア文字で記されたトルコ語）の文書史料を利用する必要があることから、イスタンブールの大統領府オスマン文書館に足繁く通っている。さて、文書館に所蔵されるオスマン語史料の読解は、当然ながら辞書なしで遂行で

きるものではない。歴史学、なかんずく文字資料の読解を行う文献史学においては、辞書という工具書が必要不可欠である。

ここで辞書と筆者自身の関係について話しておきたい。私は大学に入学した頃から、種々の外国語を（挫折しつつも）学習し始めたが、それと並行して辞書集めにも熱を入れ始めた。お金を貯めては、東京大学本郷キャンパス近辺のナガラ図書や神田神保町の穂高書店といった外国語書籍や辞書を扱う本屋から中東諸

語の辞書を買ったものである。現在に至るまで外国語の学習を始めると、その言語の文法書だけでなく辞書を実物で、またはオンライン上で徹底的に探し入手するような癖がついてしまった。ただ今思い返してみると、趣味となった辞書集めは今まで（そして今後）の研究活動に大きく役立っているかもしれない。トルコ語／オスマン語の辞書はその好例である。

20 世紀初頭オスマン帝国の労働運動家の著作や当時の新聞といったオスマン語史料を用いて執筆した卒業論文では、2 冊のオスマン語・英語辞書『レッドハウス辞典：オスマン語／トルコ語・英語 Redhouse Sözlüğü: Osmanlıca/Türkçe-İngilizce』及び『トルコ語・英語辞典 Turkish and English Lexicon』が大きく役立った。前者の Redhouse Sözlüğü はラテン文字索引の辞書であり、ラテン文字で記された単語の横に、19 世紀から 20 世紀前半ごろに用いられたリカー体と呼ばれる手書きのアラビア文字の単語が付属している。後者の Lexicon は 19 世紀前半頃にオスマン政府に雇われていたイギリス人レッドハウスが編纂した辞書であり、現在、リプリント版が流通していて入手可能である。この辞書はアラビア文字索引となっていて、アラビア文字順に単語の意味を確認するときに有用である（ただし単語数が膨大であるために、その意味や用法を確認するときに手間がかかる）。

修士課程に入ってから、トルコ語・トルコ語辞書も使うようになり、例を挙げると、フェリト・デヴェリオール Ferit Devellioğlu 編纂の『オスマン語・トルコ語百科事典 Osmanlıca-Türkçe Ansiklopedik Lûgat』とオチュケン出版社の『オチュケン・オスマントルコ語辞典 Ötüken Osmanlı Türkçesi Sözlüğü』である。前者は、アラビア語及びペルシア語起源の単語のみしか扱っていないものの、アラビア語やペルシア語の単語や表現をふんだんに使うオスマン語史料を読解する上で有用である。トルコ語起源の単語も含めた後者の辞書は、他の辞書と比べて単語や表現を詳細に説明してい

るために、研究活動において必須なものとなっている。以上の辞書の他に、技術の発展を感じさせるものとして、ネット検索やスマートフォン・アプリ型の辞書が登場したわけであるが、特にスマートフォンから Lugatim の名でダウンロードできる『クッベアルトゥ辞典 Kubbealtı Lugatı』は使い勝手が良い。重い辞書を背負って文書館まで行くのは辛いため、文書館では、携帯アプリの辞書を引いて、文書中の単語の意味を確認するなどして読解を行っている。それ以外にも、留学生活やトルコ語学習においてわからない単語や言い回しの意味をすぐさま確認したいときには、携帯に入っている辞書は大きく役立っている。このように、筆者は、オスマン語・トルコ語を含めた外国語の史料の読解において、辞書の電子化という恩恵を多大に得ている。

トルコ語の他に、筆者の研究では、ブルガリア語やギリシア語、ラディーノ語（オスマン帝国のユダヤ人が用いていたヘブライ文字のスペイン語）などの史料を読解する必要があるのだが、これらの言語の辞書を引く際にトルコ語起源の単語を発見すること（逆も然りで、トルコ語辞書中のギリシア語やブルガリア語起源の単語の発見）は大変楽しいものであり、オスマン帝国の広域的・歴史的な影響力を感じさせる。

文書館での調査活動

先述のように、イスタンブルに留学する筆者は、主にオスマン文書館において資料調査を行っている。この文書館では、パソコン上の画面から史料を閲覧することができ、たいいていの場合、カタログ上の要約からキーワード検索を行うことで、史料を易易と見つけることができる。史料の複写に関しても、申請する史料画像の点数が多くなければ、大体 5 分から 10 分の間で史料を CD に焼き付けてくれるように、文書館の利便性は高い。アンカラに所在する大統領府共和国文書館（トルコ共和国建国期以降の文書を所蔵する文書館）もまた同様の状況である。イランやエジプトなどの歴史を研究する日本人の先輩方の話を聞く限り、

トルコの文書館事情は大いに良いと思う。余談となるが、アンカラの共和国文書館で資料調査を行った後に、イスタンブルのオスマン文書館職員から、同文書館のパソコンにおいて、アンカラの共和国文書館に所蔵されている文書史料を閲覧できるということを聞いたときは愕然とした（わざわざアンカラに行く必要はなかったのである）。

以下に言及するブルガリアやギリシアの文書館と比較しても、確かにトルコの文書館のアクセスやデジタル化の具合というのは驚くほど進展している。しかし他方で、歴史学を専攻する者として、オスマン文書館で現物の史料に触れて閲覧することが基本的に不可能なのは、大きな不満である。史料保存の観点から、デジタル化が最善の策であるのは間違いないが、やはり地域研究、とりわけ地域の歴史を勉強する者として率直に言えば、当時の人々が記した文書史料を直に触りつつ読解したいのである。この事情は、オスマン語新聞にも当てはまる。例えば、イスタンブルのアタチュルク図書館やベヤジット国立図書館所蔵のオスマン語新聞を閲覧しようと訪れたものの、新聞史料全てがパソコン上でデジタル公開されていることを理由に、残念ながら、実物を直接閲覧できなかった。

ただし、ブルガリアやギリシアなどのトルコ国外の文書館・図書館において史料を直接触れる機会を得ることができ、筆者としては僥倖であった。博士論文のテーマの一部として、オスマン帝国末期サロニカ（現ギリシア領テサロニキ）の社会主義運動・労働運動について研究している筆者は、サロニカ周辺で活動したユダヤ人やブルガリア人社会主義者の機関紙、サロニカの社会経済に関する文書史料などを収集・読解している。自身の研究を進めるために、ブルガリアの首都ソフィアにあるキリル・メトディ国立図書館を訪れ、そこで現物のブルガリア語やラディーノ語新聞史料や小冊子などを閲覧する機会を得ることができた。筆者が研究する時代の、100 年以上前の史料を直接手に触れ、一枚一枚頁をめくるときの興奮は大きいものであった（ただし、

頁をめくる度に、新聞や冊子の紙片がぼろぼろと剥がれ落ちたときは恐怖したが)。

これに続いてギリシアでは、研究対象の地域にあたるサロニカを訪れ、現地のマケドニア歴史文書館において史料調査を行った。文書館を利用するにあたって、手始めに、オスマン語史料を担当する職員にメールを送り、来館の日時、カタログ中の閲覧希望の史料を伝える必要がある。このように、トルコの文書館と違い電撃訪問ができないことに注意しなければならない。さて、サロニカの文書館では、サロニカの社会状況に関するオスマン語で記された裁判史料や行政文書などを調査した。イスタンブールのオスマン文書館のように、PC 上でのカタログ検索はできないために、現物の史料(帳簿型の史料であるために頁数が膨大であった)をページごとに細かく読んでいく必要があり、自分の研究にとって重要だと思われる部分を撮影した。夏場のエアコンがない蒸し暑い部屋で行った、このような作業はなかなか苦労するものであり、体力・気力が奪われてしまった。しかし、効率性や作業環境を抜きにして、ブルガリアでの調査と同様に、過去の人々が記した史料を直接目にして触れて読解するという作業は、歴史学を学ぶ者として、得難い貴重な経験になったと考える。

最後に

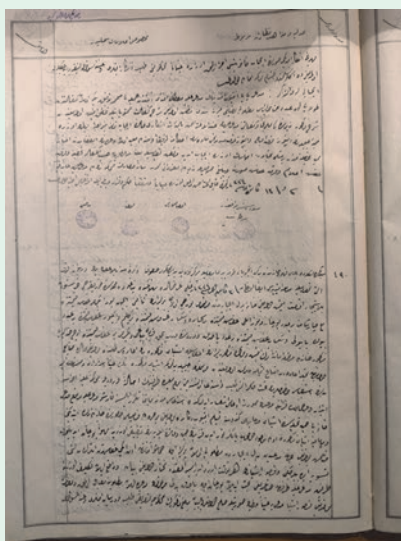
目や耳、あるいは(食文化の文脈で)舌といった感覚を通じ、地域の様相を深く知ることが留学の醍醐味だと言える。地域研究・歴史研究に携わる者として、筆者は機会があれば、史料上に出てくる場所を訪れているが、これは、場の実際の・空間的な感覚や状況を把握するためである。史料上からは知ることができないものが、現地に訪れて周辺を探索するフィールドワークから得られるかもしれない。長期留学はゆとりをもってフィールドワークを行う機会を与えてくれるため、残りの留学期間、暇を見つけては、イスタンブールだけでなくトルコ各地やバルカン諸国を訪れてみたい。



筆者がよく使用する土語辞書のデヴェリール(左)とオチュッケン(右)



ギリシア・テサロニキ所在のマケドニア歴史文書館



マケドニア歴史文書館所蔵の 20 世紀初頭に作成されたオスマン語の法廷史料

(2) 資料を追う現地調査 広がる研究可能性と垣間見える社会の実像

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士課程

松原 優華

私は、西アフリカにあるシエラレオネの地方統治について研究している。多くの人にとって、シエラレオネと聞いてまず想起するのは 1991～2002 年に生じた武力紛争、2013～2014 年のエ

ボラ出血熱といった人道危機かもしれない。私がシエラレオネを研究対象とした理由も、この武力紛争とその後の平和構築への関心からだ。2002 年に紛争が終結して以来、この国では平和が維持されてきた。確かに、2020 年代には全国規模の反政府デモが年に数回発生し、20 年以上ぶりにクーデタ未遂も起きている。それでも、政権転覆や武装闘争が頻発している周辺諸国と比較すれば、シエラレオネは「安定」しているといえる。このような紛争後の「安定」がどのように達成され、維持されてきたのかという関心からこの国について研究している。

情勢は比較的安定しているが、シエラレオネは渡航可能なアフリカ諸国の中でも現地調査のハードルが高い国の 1 つだろう。私が初めてシエラレオネを訪れたのは、博士課程進学後の 2023 年 9 月のことだった。この時、資料の所在など現地調査を行うための情報だけでなく、治安などの基本情報の収集も難しかった。この難しさの一因は、現地を知る日本人の少なさにある。外務省によれば、シエラレオネ在住の日本人は 20 人程度であり、その多くは JICA や国際機関の駐在員である。こうした人たちは 2～3 年の任期で、入れ替わりが激しい。逆に、渡航の度に新任の駐在員に巡り合えることは楽しみの一つだが、初渡航の際には、現地を知る日本人から情報を得るのは難しかった。

そのため、私が頼ったのは在日シエラレオネ人だった。法務省によれば、2024 年の在日シエラレオネ人は約 80 人である。これは、近隣諸国と比較して非常に少なく、例えば在日ガーナ人は約 3000 人、セネガル人は約 1000 人、ギニア人も 600 人を超えている。私は、幸いにも修士課程で在籍していた東京外国語大学のシエラレオネ人留学生を頼ることができた。初渡航の前は、彼らの家族や友人を通じて情報を集め、現地では彼らを頼りに調査をしている。このように、私は入れ替わりの激しい日本人駐在員や留学生たちの家族の協力を得ながら手探りで現地調査を行っている。

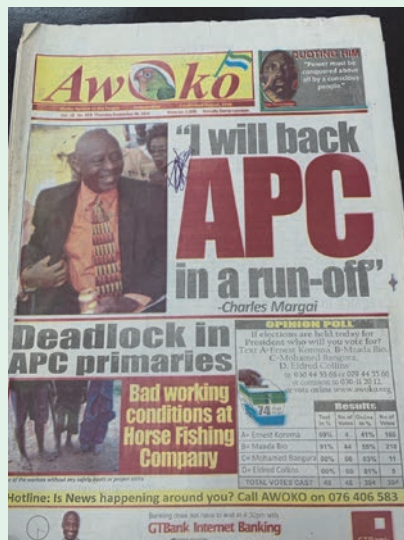
現地調査のハードルは高いが、この国を研究し続けるためには現地調査が必要不可欠である。世界中の関心が集まった1991～2002年の武力紛争や2013～2014年のエボラ出血熱に関する資料はインターネットでも収集できる。しかし、私の研究テーマである2000年代以降の地方統治に関する情報はアクセスが難しい。そのため、シエラレオネを研究対象にした修士課程在籍中から、博士論文でもこの国を研究するなら現地調査が必要だと強く感じていた。そして、博士課程進学後から現地調査を行い、首都フリータウンでは資料収集と聞き取りを、3つの地方都市ではホームステイをしながら聞き取りを中心に行ってきた。今回は、フリータウンで資料調査を行っている2つの場所について紹介する。

シエラレオネ大学の図書館と公文書館

第一は、シエラレオネ大学フォーアー・ベイ・カレッジである。この大学は1827年に設立された8つの学部をもつ、西アフリカで最も歴史のある総合大学である。全国に数あるキャンパスの中で、首都にあるフォーアー・ベイ・カレッジがその中核を担っている。調査中、私はこのキャンパス内にある大学図書館と国立公文書館に頻繁に通っている。

大学図書館では2000年代以降に発行された新聞を収集している。シエラレオネの主要な全国紙の中には電子化されているものもある。しかし、ウェブに掲載されているのは紙媒体で発行された記事のごく一部に過ぎず、過去の記事を探すのは容易ではない。一方、この図書館には紙媒体の主要紙が保管されている。新聞は年ごとに山積みされているだけで製本されていないが、2000年代以降であればどの年もいずれかの主要紙が部屋のどこかにある。そのため、新聞収集は目的の年の山を探すところから始まる。目的の山が見つかったら、折れたり破れたりしている新聞をめくりながら目を引く記事を1枚ずつ撮影する。特に、選挙などの重要な政治イベントがある時期は、選挙動向や結果予測、政治家や読者の寄稿、書面を通じた読者間の論争が

掲載されている。こうした記事からは、選挙に向けた熱量の高まりを感じとれる。2024年7月の渡航時には、期末試験に向けて勉強する学生たちに不思議な顔をされながら、部屋の片隅でひたすら新聞をめくっていた。「白人」が来ること自体が珍しいキャンパスにおいて、このような私の調査風景は彼らにとって不思議な光景だっただろう。



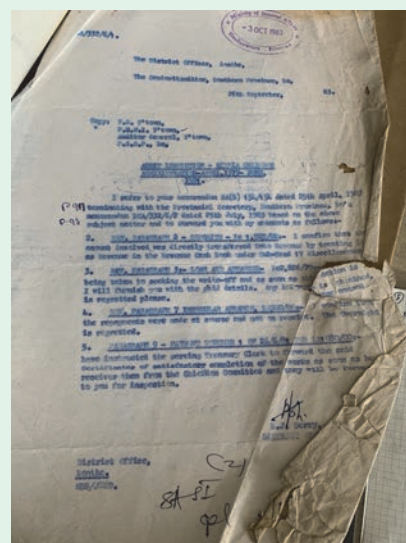
選挙動向を報じた新聞

このキャンパスでのもう一つの目的は、国立公文書館が保管する行政文書の収集である。公文書館といっても、そこはキャンパス内の教室の一室である。この部屋では独立以降の史料をテーマごとに割り振られた番号ごとの箱で保管している。しかし、目録のようなものはないため、司書さんに希望する史料を相談して3～5日後までに関連しそうな箱を用意してもらい、史料を閲覧する。しかし、箱の中身は開けてみないとわからない。無関係の史料が混ざっていることや、年代も地域もバラバラに入っていることも多い。保管状況も悪く、2000年代の史料でも折れていたり破れていたり、史料の間から虫が飛び出してきたり、虫の死骸が挟まっていたこともある。こうして集めた史料の中には、1970年代の地方議会の収支報告や、首都で行われた地方行政機構の改革案を検討する会議の文書、地縁・血縁に基づく伝統的首長（チーフ）の弾劾を求める

請願などがある。これらは、1990年代までの地方議会に関する議論や、チーフの権威を絶対視する先行研究の議論に再考を迫る可能性を示唆する重要な史料である。文書館でこれらの史料を年代や地域を網羅的に収集することはできないが、それでも、ここで目にする史料は研究可能性を広げてくれるものばかりである。



公文書館



史料

この文書館の利用時間は平日9時から16時である。しかし、1人しかいない司書さんは、利用者がいない日は11時ごろに出勤している。そのため、事前に何時ぐらいに開けてほしいか連絡する必要があるが、それでも結局は1時間弱待つことになる。閉館時間も司書さんの気分次第である。特に、金曜日は流動的で14時には閉まる（か、閉室になる）。これは司書さんがムスリムであり、お祈りに行くためである。公文書館に限らず、金曜日の午後は行政機関や町中のお

店は閉まっていることが多い。

シエラレオネは人口の60%がイスラム教徒、10%がキリスト教徒といわれる。この宗教の違いは内戦や政治的な対立の火種になったことはない。人間関係の障壁にもなっておらず、職場や学校に異なる宗教の人がいることは当たり前である。地方でホームステイしていた際には、教会とモスクの看板が並んでいることや、キリスト教の教会が運営している学校にムスリムの子どもが通っている姿を目にしたこともある。その学校では聖書の読み合わせもするそうだが、ムスリムの子も一緒に聖書を読んでいるという。町には毎日アザーンが響き渡り、金曜日は各地のモスクに人々が集まる。一方、日曜日には各地の教会でバンドの生演奏に合唱とダンスを交えたコンサートのようなミサが行われる。私が首都と地方部でミサに参加した際には、私を含む初参加の人への歓迎の言葉から始まった。こうしたお祈りの場からは、異なる宗教の共生だけでなく外から来た人や「他者」への包摂性を感じられた。

国会資料室とセキュリティチェック

私が資料調査をする二つ目の場所は国会資料室である。この資料室には、国会の議事録や官報に加えて、政府諸機関の年次報告書も保管されている。これらは、議論の中核となる基本的な行政文書だが、諸機関のウェブサイトからは収集できなかった。そのため、この資料室にアクセスできたことで、地方統治改革の制度とその変化を迫るようになった。さらに、大学図書館や公文書館よりも資料の管理状況がよく、半日作業しても手が真っ黒にならないことや、室内を自由に歩き回りながら資料を探せることも、私にとって作業しやすいポイントである。しかし、ここも政府機関の資料が網羅的に揃っているわけではない。例えば、選挙管理委員会はシエラレオネが複数政党制を再導入した1996年に設立

された重要な政府機関だが、年次報告書があったのは28年中7年分だった。国会の議事録や官報も、1年分あるように見えて数か月分欠落していることがほとんどである。一部の官報は大学図書館にも保管されているが、それでも見つからない号の方が多い。そのため、直近の行政資料でも網羅的な収集は諦めざるをえないが、この資料室は私にとって重要な資料調査の拠点である。



国会資料室

この資料室を利用するには、複数のセキュリティチェックを通過する必要がある。これは、この資料室が国会と同じ建物内にあり、その建物が政府機関の建物が集まる首都中心部の丘の上に位置しているからである。そのため、丘のふもとから国会までの間に武装したセキュリティがいるゲート2つと、建物の入り口でチェックを受ける。最初の数日はゲートごとに電話で国会資料室の室長に事情を説明してもらい、武装したセキュリティの横を緊張しながら通っていた。しかし、国会資料室にアジア人が来たのは初めてのようで、すぐに顔と名前を覚えられ、今や「顔パス」になっている。

シエラレオネでは、このエリアだけでなく町中でも警察が巡回している。これは、2022年8月に発生した大規模な反政府デモや2023年11月のクーデタ未遂の影響による。現地調査中にも反政府デモが発生し、町中で重武装の国軍兵士が警戒態勢を敷き、町を結ぶ幹線道路や首都内の大通りに検問所が1週間

ほど設置された。さらに、2024年からは違法薬物の密売人や不法滞在者の取り締まりを目的に巡警がより強化されている。2024年7月の渡航時には、宿近くの交差点が重点取り締まりポイントになり、三輪バイクを拾いにくくなった。中には警察の前を通るときには車や他の三輪バイクと並走して警察の目をそらすという技を駆使して乗せてくれる人もいたが、そのような人は少数派である。こうした日々からは、「平和」と称されるこの国で、緊張が高まる瞬間とそれが日常生活に及ぼす影響を実感した。

このように、私は2023年9月からシエラレオネで現地調査を行っている。本稿では首都での資料調査について紹介したが、2024年7月からは地方部も訪問して聞き取り調査を進めている。毎回約1か月という短期間ではあるが、現地での生活状況や資料収集の歯がゆさから調査のハードルを痛感しながら、それでも少しずつ研究は進んでいる。調査の合間に垣間見える日々の断片からシエラレオネ社会の包摂的な一面が、この国の政治や社会の「安定」の背景にあるのかもしれない。その一方で反政府デモや選挙での暴動、警察の取り締まり強化などからは「安定」の揺らぎも懸念される。現地に通いつづけながら、この国の社会や今後の情勢も含めて理解を深めていきたい。

私の研究室

私が所属する東京大学大学院総合文化研究科の「人間の安全保障」プログラムは、総合文化研究科の5専攻を横断するプログラムです。学生は1つの専攻に所属しつつも、専攻の垣根を越えて分野横断的に「人間の安全保障」について学びます。社会人や国際機関やNGOなどで勤務経験のある人も多く、研究の外の世界との距離が近く刺激的な環境です。

3. 駒場中東セミナー開催報告

2024年10月16日(水)

『戦前日本における「宗教団体」の法的基準：宗教団体法(1939)における「回教」の位置付けに関する議論の考察』

金原 典子(東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員)

発表者の金原は、現代の移民の受け入れ並びに社会における宗教の受容、特に日本における「イスラーム」の受容に焦点を当てて研究を行ってきた。今回のセミナーでは、戦時下日本で制定された「宗教団体法」における「回教」の位置付けに関する一連の議論について発表を行った。

講演の構成は以下のものであった。まず、金原は本発表における論点を述べ、続いて、先行研究を踏まえた本発表の新規性について話した。その後、国内の「宗教」及び「回教」認識並びに国内外のムスリムによる「宗教団体法」(以下、本法と記す)への反応が紹介された。最後に、主に帝国議会における、本法への「回教」明記に対する賛成と反対の意見が語られた。そして、金原の議論を受けて、日本近代史を専門とする東京大学大学院総合文化研究科教授の山口輝臣がコメント・指摘を行った。そもそも、1939年という戦時下日本で制定された本法はそれまでの宗教法規を整備、統一した、日本初の体系的な「宗教」に関する法律であり、「神道教派、佛教、基督教」を「公認」の「宗教団体」として統制、保護し、その他を「宗教結社」として統制した法

律である。「回教」が「宗教団体」として記載されることを求めるムスリムの声を受けた日本の政権中枢には、イスラーム教徒が有する超国家的連帯を対ソ戦争で利用することを肝要と捉える勢力が存在した一方、得体のしれない外来の宗教から日本の神社を保護することによって日本の独自立場を確立した。

本法制定の背景として、当時の日本では、ソ連の脅威の高まりなどの国際情勢の影響を受けつつ「宗教の力」への認識が高まっていたことが述べられた。具体的には、宗教は人々の結束を高める可能性があり、ソ連との対抗の必要性から、特にイスラーム教徒の超国家的なネットワークを利用すべきと訴える声が陸軍などから上がる一方で、宗教は人々の心を惑わせ、国体をゆるがしうるものであり、国体護持の観点から統制すべきと訴える声もあった。

続けて、日本政府による宗教団体としての「回教」の法律上の「公認」を求める国内外のイスラーム教徒の反応も紹介された。国内ムスリムではトルコ系タタール人の知識人のアブデュルレシト・イブラヒムを中心に嘆願書が日本政府に提出された。また、当時のイエメン王国の王子は来日して、「回教」の「公認」に向け、大日本回教協会の要人に働きかけていた。

最後に、帝国議会内での「回教」の明記をめぐる論者に関して、賛成論者には、貴族院議員で法学者の土方寧、衆議院議員の林平馬、及び鶴見祐輔が列挙さ

れ、反対論者では、当時首相の平沼騏一郎及び文相の荒木貞夫が挙げられた。賛成論者は、「回教」を「公認」し海外の回教徒の好感を得ることで軍事的政策に貢献するべきと主張した。一方で反対の論者は日本の「国体」と「神社」を保護することを優先し、祭政一致を実現して、国民の精神的紐帯を強めるべきと主張した。以上が金原の発表である。

金原の発表を受け、山口は以下の通りいくつかの指摘を行った。まず、当時の日本政府としては「回教」を宗教団体として明記しないという結論ありきの議論の中で、後付けの論理として「祭政一致」を訴えているだけではないのかという指摘であった。次に、政府側が宗教団体として「回教」を明記することに反対する理由として、宗教法制の整備過程に焦点を当てた指摘を行った。山口によれば、明治期には欧米への配慮から、「教派神道」と「佛教」に並んで「基督教」を同列に扱うという議論が存在したが、これに「佛教」側が反対していたことで体系的な宗教法規が整備できないでいた。ところが、共産主義やソ連の脅威が高まり、それらの脅威に対抗するために国内の宗教勢力が重要視され、政府は「佛教」への優遇措置と引き換えに、「佛教」側に「三教」を同列に扱うことを認めさせた。「基督教」に関する政府と「佛教」の交渉が妥結した中で、さらに「回教」も同列に扱うとなると、再び「佛教」側が反発することが予想されたから、政府は「回教」の明記に反対した可能性があるという指摘が最後に山口からなされた。

(東京大学教養学部前期課程 河合隆志)

Demarcation of "Religious Organizations" in Wartime Japan: Discussions on the Inclusion of Islam in the Religious Organizations Law of 1939 (October 16, 2024)

Dr. Noriko Kanahara
(The University of Tokyo)

Dr. Kanahara is conducting research on the 1939 Japanese law on religious organizations. In this lecture, she analyzes the debate on whether to legally recognizing Islam as a religious organization from the perspective of protecting the national Shinto religion in Japan at that time. Additionally, she points out that some Japanese politicians expected a supranational network of Islam.

4. バフワーン文庫便り

バフワーン文庫特任研究員 倉澤 理

この原稿を書き始めた前日の2024年12月8日、50数年にわたるシリアのアサド政権が崩壊したという報が世界中を駆け巡りました。

1979年生まれ私は当然のことながら「アサドのシリア」しか知りません。

2000年、東京外大アラビア語科3年時のハーフィズ・アル＝アサド（今回、ロシアに亡命したとされるバッシェール・アル＝アサドの父）の死は、体制に何か変化が起きるのではと、固唾を飲みながら事態の推移を見守った記憶があります。

その約10年後の、いわゆる「アラブの春」の流れで起こった内戦状態、そして今回の独裁体制崩壊……。

今回の体制転換がどのようなシリアをもたらすのか、25年前の父アサドの死の時以上の緊迫感をもって、新たな展開を注視しています。

古典研究が専門で、現代中東政治に関してはメディアで報道されている以上のことしかわからない私がなぜ、シリアの今後の動静に関して思いを致すのか……。

それは公私にわたって私にアラビア語を教えてくれた恩師が、シリア人だったからです。

今回は、バフワーン文庫が所蔵する、シリア関連の書籍のいくつかをご紹介します。ぜひ読んでいただきたいと思います。

○シリア紛争と民兵 / 高岡豊著

(ii, 169頁、晃洋書房、2024.3)

※東大内では、バフワーン文庫以外で駒場図書館、本郷の総合図書館が所蔵（2025年1月時点）

※バフワーン文庫所蔵のものは寄贈によるもの。

今回の展開で大きな役割を果たしたとされる、「シャーム解放機構（HTS）」をはじめ、シリア内の様々な民兵組織の成り立ちと活動を、様々な背景を整

理しながら述べる。

○東アラブの歴史と政治 / 小串敏郎著

(xii, 274頁、勁草書房、1985.7)

※東京大学での所蔵はバフワーン文庫以外では駒場図書館及び本郷の総合図書館、法学部研究室図書室、経済学図書館（2025年1月時点）

※バフワーン文庫所蔵のものは寄贈によるもの。

オスマン帝国末期より記述が開始される。バース党に関する通史的な記述が、第7章「バース党の政権掌握と権力闘争」、第8章「バース党政権下のシリアおよびイラク」などでなされている。

○シリアの悲嘆：キリスト教徒虐殺事件 一八六〇年 / 若林啓史著

(xii, 871、40頁、知泉書館、2019.8)

※東京大学での所蔵はバフワーン文庫以外では本郷の総合図書館のみ（2025年1月時点）

1860年、多くの犠牲者を出したオスマン帝国下のレバノン山及びダマスカスにおける宗派抗争事件を、関係者の回想や記録文書などで掘り下げる。

○シンポジウム「《文学》からシリアを考える」 / 岡真理編

(159頁、中東現代文学研究会、2018.3)

※東京大学での所蔵はバフワーン文庫以外では、駒場図書館、本郷の総合図書館、現代文芸論研究室が所蔵（2025年1月時点）

※バフワーン文庫所蔵のものは寄贈によるもの。

2017年6月、東大東洋文化研究所で、中東現代文学研究会が催したシンポジウム「《文学》からシリアを考える：独裁、“内戦”、そして希望」の記録。第一部の4人の講演者による基調講演、第二部の4人のシリア人アーティ

ストによるビデオ・メッセージ、そして基調講演の講演者4人に、シリア人1人を含む数名が加わった第三部のパネル・ディスカッションの様子が収録。

入学して間もない最初の授業で、同級生の英語による質問に、「英語はダメ」（という内容のアラビア語だったと思います）と申し渡し、その後の授業もほぼアラビア語で押し通した先生。

日本にいながら、耳から外国語（アラビア語）をひたすら浴び続けるという、稀有な経験ができることに私はすっかり興奮し、東大のアラビア語科に入った甲斐があったと、授業の度に感慨に浸ったものでした。

授業時間内にとどまらず、水曜午後の「茶話会」や、ほぼ毎週末ご自宅で開いてくれた夕食会などで、公私にわたって私のアラビア語学習の面倒をみてくれたシリア人の恩師は、昨年1月、闘病の末、この世を去りました。

先生はもうこの世の人ではないのだから、今後の混乱でもはや命を落とすことはない……そう思いつつも、これからのシリアに関し、祈らずにはいられないような心境に駆り立てられます。

私がアラビア語をしゃべる時、恩師の声が甦って自分の中でこだまするのを感じます。

シリア人ではないアラブ人と会話をしたとき、「君は日本にきたシリア難民からアラビア語を習ったのか」などと言われたこともありました。

私自身は無自覚ですが、いつの間にか、私の中には「シリア的なもの」が内在しているようです。

バフワーン文庫を利用される方は、中東に関し、何らかの「とっかかり」を経て、文庫の書籍を手にとられていることと思います。

その、原体験ともいえる「とっかかり」の生々しさをいつまでも忘れることなく、中東への関心を継続していただきたいと思います。切に願います。

5. センターの活動紹介

日本中東学会第40回年次大会の開催

2024年5月11日（土）から12日（日）にかけて、東京大学駒場キャンパスで日本中東学会の第40回年次大会が開催されました。高橋英海センター長を委員長としてUTCMESに年次大会実行委員会事務局が置かれ、準備と運営を担当しました。大会冒頭では本学大学院総合文化研究科の寺田寅彦副研究科長が挨拶し、学内報である『教養学部報』を綴りながら、駒場のリベラルアーツ教育の歴史と中東研究の歩みが紹介されました。大会には、200人近くの参加者があり、各分会やセッションで活発な議論が展開されました。



オマーン・スルタン国への出張

2024年3月25日（月）から29日（金）にかけて、UTCMESではオマーン・スルタン国への出張を行いました。本学大学院総合文化研究科の増田建副研究科長によるムハンマド・サウード・バフワーン氏との会談が行われ、増田副研究科長からはバフワーン氏に対してUTCMES附属バフワーン文庫を始めとする本学の研究・教育活動への支援に感謝の言葉が述べられました。用務の合間には、人びとの誇りである古都ニズワへの訪問も叶い、オマーン・スルタン国の文化的な豊かさにも触れることになりました。



駒場博物館展示「セネガル・イスラームの歴史と文化」

2024年6月から駒場博物館エントランスの展示を「セネガル・イスラームの歴史と文化」へと切り替えました。本学に日本学術振興会特別研究員PDとして在籍する池邊智基さん、末野孝典さん、平山草太さんの協力を得て、大変魅力的な展示になっています。展示内容の差し替えなども計画していますので、ぜひ足をお運び下さい。



●UTCMES スタッフ紹介（2025年3月28日現在）

〈スタッフ〉

高橋 英海（センター長、兼務教授）
 荻谷 康太（兼務准教授）
 鈴木 啓之（特任准教授）
 倉澤 理（バフワーン文庫・特任研究員）

大塚 修（兼務准教授）
 森元 誠二（客員教授）
 木村 風雅（特任助教）
 瀬口 美加（事務補佐員）

〈UTCMES 運営委員〉

高橋 英海（委員長、総合文化研究科教授）
 荻谷 康太（総合文化研究科准教授）
 川喜田 敦子（総合文化研究科教授・副研究科長）
 黛 秋津（総合文化研究科教授）

大塚 修（総合文化研究科准教授）
 森井 裕一（総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長）
 四本 裕子（総合文化研究科教授）
 菊地 達也（人文社会系研究科教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東寄付講座運営委員会〉

高橋 英海（委員長）	大塚 修	荻谷 康太	森井 裕一
川喜田 敦子	四本 裕子	黛 秋津	

●発行者情報 UTCMES ニュースレター VOL.26 2025年3月28日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
 〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441
<https://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

編集：木村 風雅

印刷：株式会社コムラ 〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぶりとびあ3 TEL：058-229-5858 FAX：058-229-6001